

羽束師遺跡周辺の環境復元 —弥生時代後期～古墳時代初頭の調査成果を中心として—

黒須 亜希子

1. はじめに

羽束師遺跡は、伏見区羽束師菱川町、志水町、古川町に広がる周知の遺跡である。長岡京跡の下層遺跡のひとつであり、弥生時代後期から古墳時代まで存続した集落跡として知られている。

昭和55年（1980年）、京都外環状線（府道49号）建設に先立つ発掘調査により、弥生時代後期の竪穴建物や古墳時代前期の土坑、遺物を多量に含む河川跡等が発見された。またその翌年に行われた西羽束師川河川改修工事に伴う発掘調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物が重複して確認された。このため、現在ではこれらの竪穴建物と河川を含む南北約800m、東西約1kmが遺跡範囲として周知されている。ただし、当該時期の遺物はこの範囲外においても採取されていることから、その範囲はさらに広がる可能性が高い。

筆者は近年、羽束師遺跡の北西地点において発掘調査を実施する機会を得たが、その際にも後世の遺物にまじり弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式）の土器片が出土する様相を認識した。また土層確認において暗色化した粘土質シルト層（水田耕作に適した軟質土壤）の存在を確認するに及び、羽束師遺跡は居住域の周辺に一定規模の生産域（水田等）を備えた農耕集落であった可能性を思い描くに至っている。

これを検証するため、本文では羽束師遺跡付近における既往の調査成果に、近年加えられた新たな知見を加味して整理し、覚書としたい。

2. 羽束師遺跡の調査概要

羽束師遺跡及びその周辺は、都城跡である長岡京跡の範疇にあることから、開発行為に先立つ試掘調査や詳細分布調査（立会調査）の成果が累積するエリアである。すなわち、遺跡周辺の地中データを悉皆的に入手する機会を得やすい状況にある。これらの成果を収集し、整理したものが表1・図1である。以下、調査ごとに概観する。

調査① 市立羽束師小学校と神川中学校の校舎建設に伴い実施された発掘調査である。長岡京期遺構面の基盤層を除去した段階で流路や溝を有する古墳時代後期遺構面が検出されている。さらにその基盤層となる粘土質シルト層（第5層）を報告者は水田耕作土と推測し、その上面から切り込む杭列を伴う溝状遺構（SD22）を関連施設として認識する。SD22の出土遺物は寡少であるが、古墳時代後期の遺物に混じり弥生時代の遺物が含まれることは注目される。なお第5層の残存状態は、低地である2トレンチが最も良い。

調査②・③・⑤ 京都外環状線建設工事

に先立つ調査で、一連の調査区は羽束師遺跡を東西に横断する形となる。②B区と②C区の調査区北辺では弥生時代後期～古墳

時代後期の自然流路が蛇行し、調査区外へとのびている。最下層からは弥生時代後期の土器群が多量に出土した。また②B区で

表1 羽束師遺跡周辺の調査事例

No.	調査番号 (調査次数)	調査区	調査期間	種類	調査事由	面積 m ²	調査内容 (弥生時代～古墳時代)	調査機関	文献
①	左京 第9次	1～3 トレンチ	1976/12/25 ～ 1977/03/31	本調査	学校建設	7,200	2トレンチ／黒灰色粘土層（水田耕作土？）が堆積。 杭列を伴う溝（古墳時代後期）を検出。	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『長岡京跡発掘調査報告』1977 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第2冊
②	80NG-PV1	A～E 区	1980/08/04 ～ 1981/02/03	本調査	道路建設	1,825	B区／竪穴建物（弥生後期～古墳前期）、 大型土坑（古墳前期）、 自然流路（弥生後期～奈良） C区／自然流路（弥生後期～奈良） D区／弥生後期～古墳前期包含層、 大溝（古墳後期） E区／弥生後期～古墳前期包含層	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
③	80NG-PV1	F～H 区	1980/11/11 ～ 1981/01/29	本調査	道路建設	520	G区／弥生以前の溝	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	
④	80NGSS	2G～6 G区	1981/01/14 ～ 1981/05/31	立会	水道敷設	870	2G地点／古墳前期の流路	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	
⑤	81NG-PV2	I～N 区	1981/07/11 ～ 1981/12/28	本調査	道路建設	2,382	I区／竪穴建物（弥生末）、流路（古墳） J区／竪穴建物（弥生末～古墳）、断面V字形の溝（弥生後期）、柱穴 K区／水田（古墳後期） L区／水田（古墳後期） M区／水田（古墳後期） N区／水田（古墳後期）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983
⑥	82NG704	1・2区	1984/02/20 ～ 1984/03/23	本調査	宅地造成	450	1区／流路（弥生～古墳前期） 2区／断面V字形溝（古墳前期）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984
⑦	15NG465 15NG469 左京 第585次		2016/01/12 ～ 2016/02/16	本調査	個人住宅建設	96	地形の変化点 T.P.10.1mに暗色帯	京都市 文化財保護課	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度2017
⑧	00NG106		2000/06/19 ～ 2000/09/08	本調査	学校建設	300	落込状遺構（長岡京期） 建物・土坑（平安時代） 溝（鎌倉～室町時代） 畦・溝・土坑（江戸時代）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』2003
⑨	00NG213	1～4 トレンチ	2000/09/06 2000/09/07	試掘	宅地造成	85	4トレンチ／竪穴建物3棟・土坑 (弥生後期～古墳前期)	京都市 文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成12年度2001
⑩	08NG466		2009/02/05	試掘	福祉施設建設	38	ラミナを伴う湿地堆積（古代以前）	京都市 文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成21年度2010
⑪	09NG536		2010/12/27 ～ 2011/03/11	本調査	学校建設	530	畦畔を伴う水田跡（古墳後期）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『長岡京跡・羽束師遺跡』2011 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-16
⑫	12NG289	1～9 トレンチ	2012/11/01 ～ 2013/11/05	試掘	宅地造成	322	3トレンチ／湿地堆積（古代以前）	京都市 文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成25年度2013
⑬	80NGSD2	A～E トレンチ	1981/10/26 ～ 1981/12/17	試掘	河川改修	500	A2グリッド／南へ下がる湿地堆積 B3グリッド／竪穴建物3棟・土坑 (弥生末～古墳初頭) D1グリッド／流路（古墳後期） Eグリッド／流路（弥生）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
⑭	80NG2096 左京 第174次	X1～4区	2012/12/20	本調査	道路建設	4,920	北西～南東の溝、方形周溝墓（古墳初頭）	京都市 文化財保護課	『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』1991
⑮	98NG068		1998/06/29	試掘	共同住宅建設		竪穴建物1棟・土坑（弥生後期～古墳前期）	京都市 文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成12年度2001

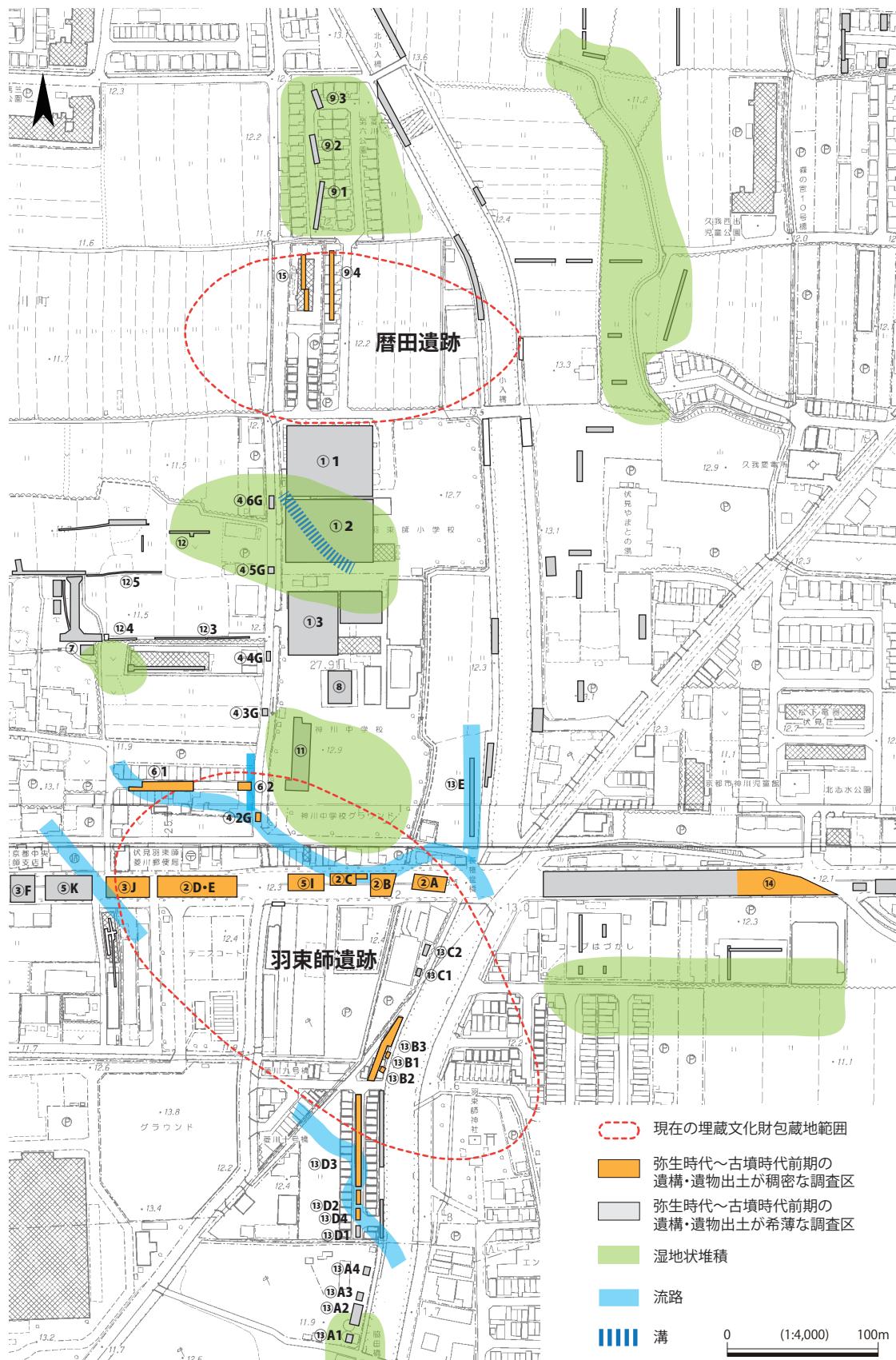


図1 羽束師遺跡の位置と周辺の調査事例

はこの流路に切られる形で方形プランをもつ竪穴建物（弥生時代後期）と大型土坑もしくは井戸（古墳時代前期）が確認されている。また、②D・E区では弥生時代後期～古墳時代の包含層が50cmの層厚をもって残存している。

③I区・③J区では、弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物と溝（SD2），古墳時代の流路が検出されている。なお、SD2からは、直柄鍬を含む木製品が出土した（後述）。

調査④ 水道敷設に伴う立会調査である。神川中学校の南西側に設定した2G地点では、GL-9.3m以下において古墳時代前期に遡る流路が確認されている。

調査⑥ 宅地造成に伴う発掘調査である。西側の⑥1区では弥生時代～古墳時代前期の流路を幅10m以上にわたり確認した。また東側の⑥2区では南北にのびる断面V字形を呈する溝が検出された。

調査⑦ 個人住宅建設に伴う発掘調査である。微高地から低地へ下がる地形の変化点にあたり、T.P.10.1m以下に存在する暗色帯が南東へ向かい徐々に厚くなる様相を確認できる。

調査⑧ 神川中学校敷地内に設定された調査区である。微高地にあたるため、①2トレンチで確認された第5層は残存しない。

調査⑨・⑮ 羽束師中学校の北側で計画された共同住宅建設と宅地造成工事に先立つ試掘調査である。⑨4トレンチと⑮では、T.P.+10.8mの深度において弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面が確認された。検出された竪穴建物4棟は方形プランをもち、うち2棟は切り合い関係にあり、

埋土には多量の炭化物が混じる。これらの発見に伴い、周辺は曆田遺跡として新規に周知された。なお⑨1トレンチ以北は徐々に下がり、湿地状堆積となる。

調査⑩ 福祉施設建設に伴う試掘調査である。長岡京期の基盤層はラミナを伴う泥砂層で、湿潤な堆積環境を示す。

調査⑪ 神川中学校校舎建設に先立つ調査である。古墳時代後期の水田が良好な状態で検出されている。畦畔の主軸は北西～南西を指す。古墳時代前期以前の遺構・遺物は確認されていない。

調査⑫ 大規模な宅地造成に先立つ試掘調査である。弥生時代～古墳時代の遺構面は確認されていないが、北半部のトレンチに比べて南半部の⑫3トレンチ、⑫4トレンチは湿潤な堆積環境にある。

調査⑬ 西羽束師川の整備事業に伴う発掘調査である。このうち⑬B3Gでは、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物が3棟検出された。いずれも近接し、うち2棟は切り合い関係にある。⑬D3Gでは北西から南西へ流れる古墳時代前期に埋没した流路が確認された。その埋土には弥生土器が一定量含まれていた。⑬A2G以南では徐々に南へ下がり、湿地状堆積となる。

調査⑭ 外環状線道路のうち西羽束師川より東の範囲において行われた発掘調査である。弥生時代～古墳時代前期の遺構は、調査区東端部の微高地上において検出された。北西～南東に通る複数の溝と、方形周溝墓と目される鉤形に曲がる溝が確認されている。

以上、弥生時代～古墳時代における羽束師遺跡周辺の調査状況を整理した。このう

ち、弥生時代後期～古墳時代前期という時期幅にフォーカスすると、以下の点を確認することができる。

- 1) 図1に示した範囲（南北800m、東西500m）の中には、竪穴建物を主体とする居住域が2箇所存在する（羽束師遺跡・曆田遺跡）。いずれも住居が重複することから、一定期間存続したと推測される。弥生時代後期～古墳時代前期という限られた時間幅を考慮すると、この二者は200m程度の距離を保ちつつ共存したこととなる。
- 2) この両居住域の間には自然流路が存在する。この流路は、弥生時代後期～古墳時代後期の間、静かな埋没堆積を示す。このことは、当該地域では流路が主軸を大幅に違えるような事態は起こっておらず、大規模な地形変化も免れたことが窺える。
- 3) 自然流路の周囲には、「湿地帯」が存在したと報告されている。当該地点では、古墳時代後期になると水田が営まれるが、気候変動が小さい環境下では、それを遡る弥生時代後期～古墳時代前期にも、すでに水田耕作に適した土壤が形成されていた蓋然性が高い。このことは、弥生時代後期においてすでに原始的な水田耕作が行われていた可能性を示すものであり、これが古墳時代後期にはより高度な水田の経営に推移したことを想起させる。
- 4) ⑭調査地点では、小規模ながら方形周溝墓の一部と見られる遺構が確認されている。これ以東は弥生時代・古墳時代の遺構・遺物の検出が希薄であることから、これが墓ならば、羽束師遺跡

集落に付随する墓域の一部となる可能性がある。

以上のことから、弥生時代後期～古墳時代前期の羽束師遺跡・曆田遺跡を含む当該地域には、複数の居住域ユニットと生産域（水田）、墓域を有する定型的な集落が存在したと想定される。

3. 農耕集落の特徴

居住域と生産域、墓域を併せ持つ集落は、弥生時代における農耕を生業とするムラの一般的な形態である。羽束師遺跡では、当該期に遡る水田遺構はまだ報告されていないが、その可能性は多分にある。これは当該時期の木製鍬が出土したことからも確実視される。

図2-1は直柄鍬の鍬身で、調査③J区から出土したものである。詳細な報告書が未刊行であるため出土状況は明らかではないが、典拠である奈良国立文化財研究所刊行の『木器集成』¹⁾には、「断面V字形を呈し、幅1.0m、深さ0.7～0.8mを測る溝から畿内第V様式併行期の壺・甕・一木鍬・掘棒（図2-5）とともに出土した」とある。

図2-1の法量は最大長23.4cm、最大幅18.5cm、最大厚2.3cm、逆台形に張り出した頭部と湾曲する肩をもつ。柄孔隆起は突起をもたないB類で、柄孔角度は鋭角、頭部前面に泥除を装着するための蟻溝を備える。側縁と頭部の一部を欠損すること、また刃先にも使い減りが見えることから実用品であることが窺える。

近畿地方の直柄鍬を概観すると、蟻溝を持つ平鍬（近畿型鍬V式）²⁾は弥生時代中

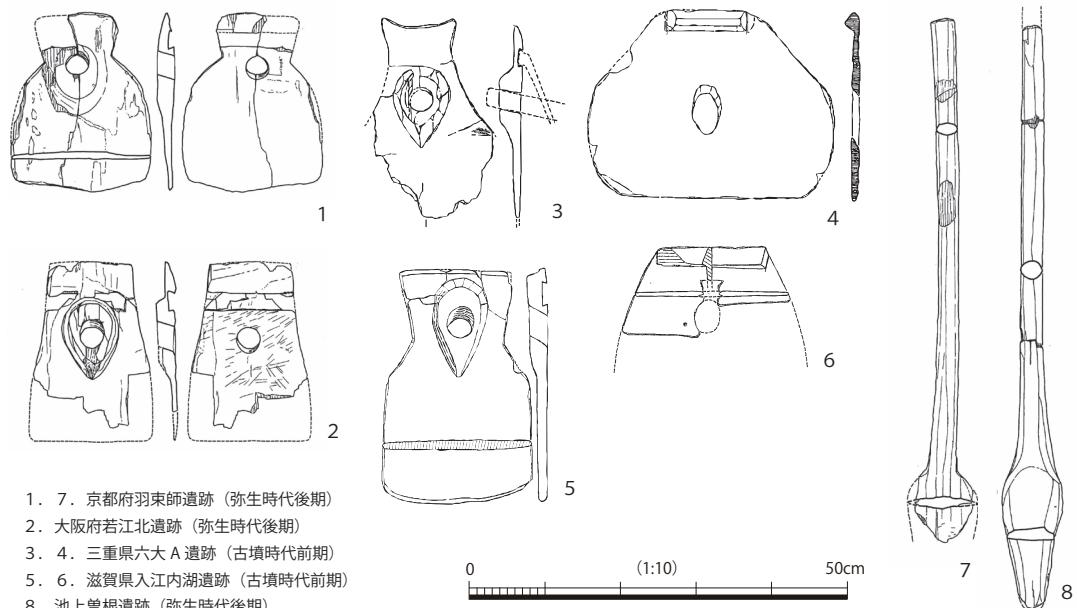


図2 羽束師遺跡出土木製品と近畿の出土事例

期末の河内平野南部にその萌芽があり、やがて近畿一円に伝播、西は瀬戸内・山陰、東は東海・北陸地方にも及ぶ。河内地域で盛行するのは弥生時代後期前半であるが、近江地域では古墳時代前期まで使用されているため、羽束師遺跡の年代観と齟齬は生じない（図3）。

泥除を装着した直柄鋤は湿潤な水田耕土を整える際に使用する道具であり、その出土は当該地域で水田耕作が行われていたことを明確に示すものである。また羽束師遺跡ではその道具を使いこなしていたと考えられることから、その農耕技術力は他の集落と同様、一定水準に達していたと考えられる。

4. おわりに

以上、弥生時代後期～古墳時代前期にお

ける羽束師遺跡とその周辺について、記述した。

当該時期に営まれた一般的な農耕集落は居住域のみでは成り立たず、その生業の源となる生産域を必ず保持している。大小の差はあるものの、生産域と墓域とあわせて扱うことが、当該集落を理解する上で重要な視点となる。現在、羽束師遺跡・曆田遺跡では居住域のみが遺跡範囲として周知されているが、生産域、墓域がその周辺に存在することを視野に入れて、調査に臨む必要があると言えよう。

註・参考文献

- 1) 奈良国立文化財研究所「B農具」（『史料第三六冊 木器集成図録 近畿原始編』1993年）。
- 2) 黒須亜希子「木製泥除の再検討」（『考古学研究』日本考古学研究会 2017年）

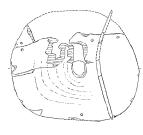
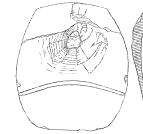
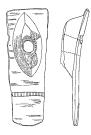
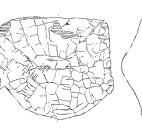
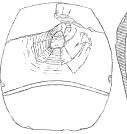
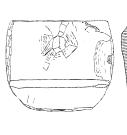
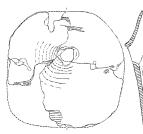
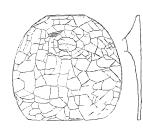
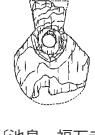
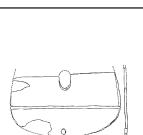
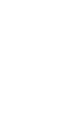
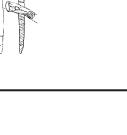
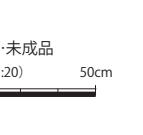
	河 内	摂 津	山城・近江
弥生時代前期	     	     	   
弥生時代中期	   	   	   
弥生時代後期～古墳時代初頭	   	   	   
古墳時代前期	   	  	   

図3 広鍬と泥除の出土事例